
おき がさっ！

芝山 玲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おき がさつ！

【Nコード】

N3400Y

【作者名】

芝山 玲

【あらすじ】

企画競作 お題「折りたたみ傘」 どの学校にもひとつやふたつ伝説がある。うちの学校の伝説は なにを隠そう私だ。私の折りたたみ傘はなんでだかすごい力を持っている。私には何にも利益をもたらさないすごい力を。 ちょっぴりラブコメ風味なので「恋愛」で投稿します。

(前書き)

企画競作 お題「折りたたみ傘」

ちよっぴりラブコメ風味なので「恋愛」で投稿しますが恋愛要素自体は薄いです。

ひらがな四文字で間に「」を入れたタイトルにしたらそれっぽくなると思った。

どの学校にもひとつやふたつ伝説がある。

真夜中に音楽室のバツハとベーターベンがにらめっこするだとか、正面玄関から裏門近くへと移動させられてしまった二宮金次郎の像がしくしく泣きながら池に小石を投げ込んでいるだとか、グラウンドから見える並木は本当は十本のはずなのにある角度からだとか九本しか見えないだとか、いまは使われていない体育倉庫の傍にある又ルデの木の下で告白すると翌日顔が腫れ上がるだとか、眉唾物のそつした伝説がある。

うちの学校の伝説は　なにを隠そう私だ。

入学式から一ヶ月。

クラスメートの顔と名前もどうにか一致し、部のくんがかっこいいだの部の先輩には負けるだのといったコイバナ未満の品評が女子の中で行われ、だいたいおおまかにランク付けが終わった頃、惚れっぽい私はバスケ部の結城君にすっかり心を奪われていた。

中学校だって違ったし、現在クラスも違う。一年生なんだからゲームに参加しているわけでもなくただ先輩たちに怒鳴られてランニングをしてボール拾いをしてボール磨きをしているだけで何かが光っているわけでもないのに、とにかく結城君ラブ、だった。

どうにかしてお近付きに、いやいや、一足飛びにお付き合いを、と思ったけれどもまずは接点が無いことには、彼はきつと私の名前も顔も知らないに違いない。

だってほら、同中でもないしクラスも違うし、だいたい私バスケできないし。

そんなわけで私は虎視眈々と結城君に近づくチャンスを狙ってい

たのだった。

部活中の結城君を見るためだけに放課後を潰して体育館へ行く。私？ 部活なんかやってる暇無いよ。結城君を見なくちゃいけないからね。

部活が終わり、一年生が片付けを始めた。

ああ、今日もチャンスが無かった。少女マンガだったら結城君がミスして取れなかったボールが私の顔面にぶつかってぶっ倒れて保健室へ。私が目を覚ますまで結城君が保健室で付き添っていてくれて、そんなときに限って養護の先生が用事で不在になっちゃって二人つきり、とかいうシチュエーションになるものだと思うんだけど、残念だけどこれ現実なのよねー。

というわけでいつもと変わらなかったな、結城君の視界にも入れなかったな、としょんぼりしながら体育館を出ようとした。

ぼつ、と小さな水滴が頬に当たったのはそのときだった。

「あれ」

掌を上に向けつつ空を見上げる。

どんよりとした灰色の空から、まばらにはあるけれど雨粒が落ちてきている。

「げ、雨だー」

「うっそ。傘持ってきてねー」

後ろから聞こえる男子の声。

これだ！

私は大急ぎで昇降口へ走った。もちろん結城君を待ち伏せするためだ。

通学用のザックから折りたたみ傘を出す。

天気予報は晴れ。降水確率は0%。それなのに私がこうして折りたたみ傘を持っていたのは、用意が良いわけでもなければ心配性の母親がいるからでもない。単に以前突っ込んでそのまんまにしていただけだ。

でもこれは運命だ。

私が片付け嫌いとかではなく、神様が用意してくれた、結城君と仲良くなるためのきっかけなんだ。そうに違いない。

リレーのバトンのように折りたたみ傘を握りしめる。

お願い。どうか結城君が一人で来ますように。

着替えを済ませ昇降口にやってきた結城君は何人かの一年生男子と一緒にたけど、クラスが違うらしく下駄箱の前でバラバラになった。

ああ、神様！ いい仕事だぜ！

私はダッシュで結城君の近くへ行つた。

「結城君！」

下駄箱から靴を出して無造作に下へ落とした結城君は、へ？ と振り返つた。

あああ、そのきよとんとした顔もかつこいいよう。

「あの、あの」

タイミング良く雨脚が強まり、屋根を叩く雨粒の音が大きくなる。

「これ！」

私は折りたたみ傘を差し出した。

一緒に帰りませんか！

続けてそう言うはずだった。

「え？ あ、助かる。ありがとう」

結城君は私の手から折りたたみ傘を引き抜いた。

あれ？

「岡崎ー！」

結城君はいきなり伸び上がって叫んだ。

「なにー！？」

遠くから返ってきたのは女の子の声だ。

「一緒、帰ろうぜー！」

「だって傘無いもんー！」

「大丈夫！ 俺、持つてるー！」

え？ え？ なにが起こってるの？

問いただす間もなく結城君は爽やかな笑顔と共に、
「ありがと。明日返すな」

なんて言っただけ靴を履き替えて走って行ってしまった。

え、ちよ。

一緒に帰るのは私だろうかー！

翌日結城君は折りたたみ傘を返しに来てくれなかった。そらそーだ。彼は私のことなんか知らないに違いない。けれども私は結城君が女子バスケ部の岡崎さんと付き合い始めた、という事を知ってしまったのだった。きっかけは不意の雨、相合い傘で帰ったこと、ですと。

それから二週間。

私はサッカー部の練習を見ていた。サッカー部の室井君は一年生。鳴り物入りで入学し入部と共にレギュラーの座を勝ち取った、とかいうことは無くて、他の一年と一緒に和気藹々と部活動にいそしんでいる。

室井君は同じクラスだ。少なくともそこで接点はある。結城君は私の名前さえ知らなかっただろうけど室井君は私のメルアドだって知っている。クラスみんなで連絡網を作ったからな。

今度こそ。

今度こそちゃんと告白してお付き合いだ！

同じクラスというのは面倒なもので、告白したくて近づいても常に誰かがいる。どこかへ呼び出そうと思っても、同じクラスの男子を呼び出すという行為自体がすでに告白しているようなもので、これもいただけない。

いつそメールしちゃうか、とか、下駄箱にラブレターを突っ込んでみたらどうだ、とかぐるぐる考えていたその日。

またしても降水確率0%のくせに夕方から雨が降り出した。

「ちよ、まじ最悪ー」

「泥はねたー」

ぎゃあぎゃあ言いながらグラウンドを突っ切って部屋へ戻っていきサッカー部員。きつと今日の部活はこれで終わりだろう。

私はまたもや昇降口へ走った。

結城君が借りパクしてくれちゃったせいで新しい折りたたみ傘を買わざるを得なかったが、買ったままザックに突っ込んでいたので突然の雨にもばっちり対応できる。

ああ、値札が付いたままだ。

やはりこれもいつか役に立つだろうと突っ込んだままにしていたソーイングセットを引っ張り出して、タグを切る。

三十分も待っただろうか。

やっと着替え終えた室井君たちが昇降口へやってきた。

「室井君！」

「あれ？ お疲れ」

部活なんかやっていない私にも室井君は、お疲れ、と声をかけてくれた。

期待持てそうじゃない？ これって良い感じじゃない？

「雨、降って来ちゃったね」

同じクラスの気安さで声をかけつつ、さも私もいま昇降口に来たんだ、というていを装って外靴を出す。

「あー。ついてねえなー」

歩き出す室井君の一步後ろをついて行く。

ついてない、って事は室井君に傘の用意は無いと見た。よっしゃあ！

「あのね、私傘持ってるんだ」

けど、一緒に帰らない？

って言うはずだったのに。

「マジで！？ あ、でも貸してって訳にもいかないか」

「へ？」

室井君が立ち止まる。私もそこで足を止める。

昇降口の校門側出口にたたずんでいたのは同じクラスの香川さん。
おおお？ これはどういうことだ？

「香川、お待たせ」

「ううん。ねえ、傘持ってる？」

「いや、持ってない……んだけど」

言いよどみつつ室井君は私を振り返った。

えー。これってそういう流れ？

「良かったら、二人で使いなよ」

新品の、まだ私も使っていない折りたたみ傘を私は差し出した。

「え。でも悪いよ、いいよ」

「ううん、いいよ。私、教室のロッカーに置き傘があるからそっち取ってくるよ。二人とももう帰るんでしょ？ 使って。あ、二人で折りたたみじゃ狭いか？ いや、狭い方がいいのか？」

にやにやと酔っぱらいの親父みたいな顔をしながら冷やかしてみたら、二人とも赤くなって俯いた。

なんだよ！ 素直に照れてんじゃねえよ！

「あ、あの。俺たちそういうんじゃない」

「う、うん。あのね、まだそういうんじゃない……」

そういうんじゃない、って言いながら、まだ、ってそれお互いに好き合ってるくせに告白がまだです、って言ってるのと同じですからー。

私は折りたたみ傘を二人に押しつけると上靴を履きに行くためにその場を離れた。

置き傘なんかしてないよ。だって折りたたみがあるんだもん。当然じゃん。けど、あそこはああ言って離れないと収まりがつかないだろうが、ちくしょう。

翌日から二人は目に毒な感じにいちやいちやし始めた。同じクラスって最悪だ。

折りたたみ傘は返ってこなかった。

どうも折りたたみ傘は縁起が悪いぞ、と思った私は、告白のきっかけに使うのはやめよう、と決めた。

小さめの折りたたみ傘で肩が触れるほどに寄り添って歩けばなんかこう恋が芽生えるんじゃないかね？ と考えたんだが恋はすでに芽生えている。私の中に。

ということは彼の中に恋を植え付けねばならんのだ。

折りたたみ傘なんてちやちなアイテムで恋が始まってたまるもんか。

だがしかし。

次に好きになったのは図書委員長をつとめている三年生の藤木さんだった。物静かな雰囲気図書室のカウンターに座っているところに一目惚れした。放課後は図書室に通い詰めて、本も読まずに彼を見ていた。たまに彼と目が合うと、彼はなんだかやたらに冷たい目で私を覗む。

ええー。ひよつとして彼も私のことを意識してくれちゃってるー？
浮かれまくって今日もまた閉館まで図書室に居座った。もちろん本は読んでいない。本に向ける目があったら藤木さんを見るに決まってる！

藤木さんが図書室の窓を閉め、鍵を確認していく。カーテンを引き、明かりを消していく。

「その一年」
図書室に残っているのは藤木さんと名前も知らない図書副委員長と私だけだ。一年、と呼ぶからには私のことだろう。

ああ、やっぱ本くらい借りるんだった。読まないにしても。そしたら図書カードで名前を覚えてくれたかもしれないのに。

「は、はい？」

「雨が降り出してる。早く帰った方がいいぞ」

「あ、え？」

雨ー！？ さっきまでめっちゃ晴れてたのに！？

「ひどくなりそうね」

副委員長の落ち着いた声が、嬉しくないことを言っている。

「晴れ予報だったから傘なんて持ってこなかったわ」

「俺もだ」

二人は最後のカーテンを閉めつつ空を恨めしげに見上げる。

「あなたは？」

副委員長が私に聞いてくる。

「え？」

「傘。持ってる？ 大丈夫？」

うーあー。

なんでこうなるのかな。

「あの」

藤木さんに、一緒に帰りませんか、って言いたいよ。でもこの状況で藤木さんだけを誘う根性はない。っていうか、藤木さんだけ傘に誘ってこっちの副委員長をほったらかしたら、この女最悪、とか思われて恋どころじゃなくなるだろ。

かといって副委員長を誘って女同士で帰る意味も見出せない。

私は渋々ザックから折りたたみ傘を出した。

今日はさすがにタグは外してあるけど、やっぱり自分では一度も使ったことがない新品だ。

「折りたたみありますから、お二人でどうぞ」

「いや」

藤木さんは上げかけた右手を彷徨させたあと、メガネのブリッジを押し上げた。

「きみが持ってきた傘だろう。きみが使いなさい」

「でも、藤木さん達は傘、持ってないですよね？」

ううう。泣きそうだよ。

「私、教室に置き傘がありますから！」

置き傘があるなんて、今回もまた嘘だけだな！

二人とも傘を受け取ってくれないから、私は閲覧用テーブルの上に傘を叩きつけると、ザツクの肩ひもをひつつかんで図書室を走り出した。

やっぱり折りたたみ傘は駄目なアイテムだー！

惚れっぼいのがいけないのかもしれない。

その後も二年の先輩に、見かけただけの先生に、と一目惚れは続いた。同じ一年だって四百人いるのだ。男女比は六対四だけど。

誰か一人くらいにはまともな告白できるだろう、と思うのに、つけ狙い いや、告白のタイミングを見計らっている内になぜか突然雨が降る。

折りたたみ傘を持っているときに限って雨が降る。

一緒に帰りませんか、と誘いたいのになぜかその場には女子がいる。

一応私だって事前調査くらいしてる。

彼女はいない、って確認してから、よし、って行ってる。

なのにいざって段階になるとなんでだか女子がいて、どうやら彼はその女子を憎からず思っているようで、女子もなんとなく彼が気になっていたりするらしく、私は折りたたみ傘を進呈しなくてはいけなくなる。

そしてその翌日にはカップル様ご誕生だ。

こんなことが二十回も続いてみる。

すっかり私は愛のキューピッド様だ。

私から折りたたみ傘を借りて相合い傘で帰ると恋が叶うらしい、とか、その際に私が『置き傘があるから平気』と言わないとだめらしい、とか、使い古した折りたたみ傘ほど御利益があるらしい、とか、噂が噂を呼んで胸びれも背びれも尾びれも着いて、入学半年と経っていないのに私は学校の伝説となった。

私の折りたたみ傘はいまや引つ張りだこだ。

しかもカップルになってしまった二人は折りたたみ傘を返してくれない。

この傘が二人を結びつけてくれた、記念の品だ、とかなんとか言っ
て大事に保管をしているらしい。使えよ、傘なんだから。

代わりに傘代は払ってくれるので私はそのお金で新しい折りたた
み傘を買う。

以前は可愛い柄のやつとか超軽量とか三つ折りコンパクトとかつ
てのを選んでいたけど、どうせ私の手元には返ってこないんだから
いいやつを買ったって意味がない、と開き直ってスーパーに売って
いる一本五百円の折りたたみを買うようになった。

私の伝説が浸透するに従ってうちの学校に折りたたみ傘を持って
くるやつはいなくなってしまうたから、私のザックには折りたたみ
傘が少ないときで三本、多いときには十本入っている。

バカだ。

学校になにしに行ってるんだ。

雲一つ無く晴れていたある日のこと。

私はまたしても最近一目惚れした剣道部の二年生、鈴原さんのお
っかけをしていた。

柔剣道場は独特のにおいがする。汗がかもされちゃったようなに
おいだ。ぼかしてますよ。これ、はつきりとは言っていないですよ。

長く嗅ぎ続けていると頭が痛くなりそうだから、窓から覗いては
頭を引っ込め、また覗いて、とやっているので私の存在自体はバレ
バレだが、なんと言っても私はこの学校の伝説だ。誰も邪険にはし
ない。っていうか、部活中に予定外の雨が降ってきたらラッキー、
と思っっているやつらがいっぱいいるに違いない。

そろそろ部活も終わり、という頃になってにわかにかが広がって
きた。

おいおい。

ぽつ、ぽつ、と小さな水滴が落ち始める。

誰だ、いま『キター！』って叫んだの。

鈴原さんに声をかけたい。私と一緒に帰りませんか、って言いたい。でも多分ザックから折りたたみ傘を出して彼に差し出したら、彼は違う人と帰るんだ。

どうしよう。

どうしたらいいんだろう。

毎日毎日見に来てたけど、私が誰を見てるかなんてことはまだバ
レしていない。

鈴原さんにさえ声をかけなければ、鈴原さんは私じゃない誰かと
付き合いだしたりしないんじゃないのか。

折りたたみ傘を出さなければいいんじゃないのか。

そんな後ろ向きなことを考えながらザックの中に手を突っ込む。

今日は八本入っていた。

「全員分は無いです！ じゃんけんで八人！」

折りたたみ傘を掲げつつ大声で言うと、さっそくじゃんけん大会
が始まった。その輪の中には鈴原さんもいる。

ああ、だめなんだな。

顔に出さないように、態度に表さないように。

私は折りたたみ傘を握りしめる。

どうか勝ち上がりませんように。

そんなささやかな願いさえも神様は聞いてくれない。じゃんけん
大会は初めてじゃない。今までにも何度かやった。その中には当然
のようにそのときの私の思い人も混じっていて、そして彼は必ず勝
ち上がり、私から笑顔で折りたたみ傘を受け取ると私じゃない誰か
のところへ走っていく。

きつと今日もそうなんだ。

失恋を覚悟した私の目に映ったのは、負けて輪から外れる鈴原さ
んの姿だった。

鈴原さんは八人の中に入らなかった。

なに？　なんで？

じゃんけんで勝った八人が口々に、ありがとう、明日傘代払うな、と言って折りたたみ傘を持って行く。

傘をゲットできなかった人たちは、やっかみ混じりのヤジを飛ばし、片付けを始める。

どうしたらいいんだろう。

傘は無い。

折りたたみ傘は全部渡してしまった。

置き傘なんて本当はいつだって無い。

いつかは好きな人と折りたたみ傘で相合い傘ができると思ってるから、置き傘なんてしてない。

自分が濡れるのは、だから、いい。

けど鈴原さんは。

鈴原さんが濡れるのはいやだ。他の誰かと一緒でもいいから濡れずに帰ってほしい。

だけどいまの私にはどうすることもできない。

なんで鈴原さんは折りたたみ傘をゲットできなかったんだろう。

好きな人がいない、とか？

でも私の折りたたみ傘は全校生徒が知っている曰く付きだ。ただの雨具じゃない。これを使って告白したら100%なんだ。だからじゃんけんでの取り合いになる。その争奪戦に参加しておきながら好きな人がいないっていうのは考えにくい。

のろのろと昇降口へ移動しながら考える。

ああ、もしかしたら。

私は嫌なことに思い当たった。

鈴原さんが好きな人は鈴原さんを好きじゃないのかも。

告白してもカップル成立しないからじゃんけんで勝てなかったのかも。

うわあ、なんか凹む。

自分の恋じゃないのに凹む。自分が好きな人が他の人を好きだとわかっててもそれが上手くいかない、って彼より先に知ってしまったことに凹む。

「ほい、と靴を下に落とす。ひっくり返ってしまったのをつま先で上向かせる。行儀悪いけど誰も見てないからいいや。」

「あの」

野太い声が後ろからかかる。

「私か？」

振り返ったそこにいたのは鈴原さんだった。

「うわあ、と焦った拍子に背中を下駄箱にぶつける。」

「てっ！」

「大丈夫か」

「うわ、は、はい！ 大丈夫です！ ぜんっぜん大丈夫です！」

「スチール製だからすごい派手な音がしたけど、それどころじゃないから。」

「きみは」

鈴原さんは少し迷ったそぶりをしてから言った。

「傘は？」

「あ。えーと」

靴まで履き替えるのに置き傘があります、ってのも不自然だよな。

「きよ、今日はたまたま全部出払っちゃいまして！」

笑ってごまかせ。

「全部？ まさか自分で持ってる折りたたみ傘を全部他人に貸してしまったのか？」

「はあ」

私の返事に鈴原さんはちょっと眉を寄せた。こいつ大丈夫か、みたいな目で見るのはやめてえ。

「置き傘がある、と聞いたことがあるが？」

「このあいだ使って、家に置きっぱなしにしちゃいましてー」

「ごまかされるー。お願いだからごまかされてくれー。

「どれだけお人好しなんだ」

鈴原さんは手を額に当て、ため息をついた。

こんな状況でなければ堪能したいかつこよさだ。

別にお人好しってわけじゃない。どっちかって言うと自分のことしか考えてない。

一本ぐらい隠して手元に残してもいいんじゃないかと思ったこともあったけど、なんかこう、濡れて帰るのって、失恋したーって気分をしみじみと味わえるんだよね。

痛いから誰にも言わないけど。

「きみの傘は確実に告白を成功させると聞いた」

「そういうことになっちゃってるみたいですね。ただの傘なんですけど」

近所のスーパーで一本五百円の、誰でも買える傘なんですけど。

「だから確実に期したかったんだが」

鈴原さんはそう言うとかバンの中から黒い折りたたみ傘を出した。

私の方を見ないようにしてそれを差し出してくる。

「一緒に帰らないか」

返事なんか決まってる。

そりゃもう全力で返事した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3400y/>

おき がさっ！

2011年11月8日04時13分発行